

データ連携基盤ワークショップ「勉強会」実施報告（概要）

エリアデータ連携基盤やデータ利活用についての県内関係者の理解・関心を高めることを目的として、勉強会を開催しました。大学・自治体職員・民間企業等の計35名が参加し、データ利活用のポイント等を学びました。また、データ利活用に精通した3名の講師を招き、データ利活用の具体的な事例や滋賀県内における先進的な取組の紹介を行いました。

実施概要

- データ利活用のポイントやエリアデータ連携基盤の概要・国や他自治体の動向等についての紹介
- 「子ども」「健康」「交通」をテーマに、データ利活用の方法や効果、エリアデータ連携基盤を活用した事例についての紹介
- 滋賀県内における、様々な自治体・企業・大学との先進的な取組みや新たなアプローチ等の紹介

日時	12/19(金) 13:30-15:30
場所	滋賀県庁新館7階 システム設計室1A・1B（またはリモート）
参加対象者	滋賀県地域情報化推進会議の会員および会員関係者 （自治体の職員、企業の経営者・社員、大学生等）
講師	NTT西日本株式会社 酒井 英徳 トヨタ・コニック株式会社（DAS LAB 代表） 神野 恭光 株式会社インテージ 星合 秀宣
勉強会内容	I. データ利活用による効果とプロセス（成果創出のポイント） II. データ連携基盤の概要と活用事例、国や他自治体の動向等 III. 具体的なデータ利活用の事例紹介 IV. 滋賀県内における先進的な取組みの紹介

参加者

計35名（うちリモート参加20名）

大学生	5名		
自治体（滋賀県）	13名	民間企業	9名
自治体（県内市町）	7名	一般社団法人等	1名



データ連携基盤ワークショップ「ワークショップ」実施報告（概要）

エリアデータ連携基盤を活用した、地域課題解決に繋がるユースケースの検討に取り組む、全2回のワークショップを実施しました。大学生・自治体職員・民間企業等の計25名が参加し、「子ども」「健康」「交通」の3つのテーマにわかれてディスカッションを行い、課題の探索から課題解決に向けたアイデアの検討・発表までを行いました。

実施概要

- 「子ども」「健康」「交通」の3つのテーマについて、グループごとにテーマを1つに絞り、ディスカッションを実施
- Day1では、Well-Being指標の読み解きや各人の想いや生活実感をもとに地域課題の探索を実施
- Day2では、グループで考えた地域課題を解決するためのアイデアの検討、および発表を実施

実施スケジュール

	日時	実施内容
Day1	1/27(火) 13:30-16:30	<ul style="list-style-type: none">Well-Being指標についての講義データ×想いによる地域課題の読み解き取組の方向性の検討と課題の深堀取り組む「課題・領域」の決定
Day2	2/18(水) 13:30-16:30	<ul style="list-style-type: none">具体的なプロジェクトの企画検討最終発表

参加者

計25名

大学生	3名		
自治体（滋賀県）	3名	民間企業	13名
自治体（県内市町）	3名	一般社団法人等	3名

ワークショップ当日の様子

- 大学生・自治体職員・民間企業といった立場の異なる参加者が活発な議論を行い、課題解決に向けたアイデアの検討・発表を行いました。



データ連携基盤ワークショップ「ワークショップ」実施報告（概要）

発表内容

【グループ1（分野：子ども）】

【タイトル】

天下分け目のゴミ活～びわ湖を美しくする県民の日制定へ～

課題認識：子どもの自己肯定感が低く、夢や希望を持ちにくい中で、滋賀の良さが県民に十分伝わっていない。

提案アイデア：7/1（びわ湖の日）を「県民の日」に位置づけ、県民参加の清掃活動を実施する。ごみをアプリで撮影し、地域・学校対抗などゲーム性で参加意欲を高め、世代間交流の場もつくる。

データ連携基盤の活用ポイント：ごみ量・種別、参加者数、学区情報、環境データ、人流などを統合し、AIで可視化・分析して活動の広がりや成果を見える化する。

期待される効果：琵琶湖を守る共通体験を通じて、子どもの地域愛着と貢献感を高め、県民のつながりを強化する。

【グループ2（分野：健康）】

【タイトル】

つながりのハブ～新しい居場所を見つけよう～

課題認識：孤独やコミュニケーション不足が課題で、健康状態は良くても幸福度が低い点の問題となっている。

提案アイデア：多様なデバイス等でデータを収集し、交流機会（居場所・イベント等）につながる情報提供で、人と人のつながりを増やす。コミュニケーション活性化により、精神的な幸福度の向上を目指す。

データ連携基盤の活用ポイント：イベント等の「場のデータ」と個人特性（ニーズ・経歴等）、健康データを連携・蓄積し、AI分析で適切なマッチングや施策設計に活用する。

期待される効果：孤独の緩和と交流の促進により、精神的幸福度を高め、健康の維持・向上につなげる。

【グループ3（分野：交通）】

【タイトル】

びわこ巡り、巡る。

課題認識：滋賀県民の交通に関するWell-Beingが低く、特に県北で二次交通（最寄駅からのアクセス）不足や情報フォーマットの不統一が課題である。

提案アイデア：駅を起点にバス等の二次交通を充実させ、キャンプ場等と連携して「目的地」を創出する。地域通貨（アプリ）と連動し、利用に応じたポイント付与で「また来なくなる仕組み」をつくる。

データ連携基盤の活用ポイント：路線・ダイヤ・乗降客数などの交通データと、観光施設の来訪者数や利用者属性を連携し、最適な路線設計や施策効果検証に活用する。

期待される効果：車に頼らず目的地へ移動できる環境を整え、観光消費の増加や観光地の偏り改善、地域活性化を促す。

【グループ4（分野：交通）】

【タイトル】

各拠点（旧町）をつなぐ公共交通の実現

課題認識：公共交通の本数が少なく車依存が進む中、旧町ごとに拠点が分散し、世代別の移動ニーズに合った移動が実現しにくい。

提案アイデア：旧町の拠点間をバスや自動運転等で結び、定期券利用を中心に「常につながっている安心感」のある公共交通を実現する。拠点間は行政主導、拠点から目的地は民間（MaaS等）で補完する。

データ連携基盤の活用ポイント：人流データ（時間帯別の交通量など）や既存の公共交通乗車データを連携し、運行ルート・頻度のシミュレーションや実証効果測定に用いる。

期待される効果：交通弱者を含む市民の移動の選択肢を増やし、生活利便性や過ごし方の格差を是正して、安心して暮らせる地域づくりにつなげる。